札幌西支部 岡崎 正毅 Masaki Okazaki

TKC的な洗礼を受ける

私がTKC全国会・北海道会に入会した平成12年（2000年）の夏、ロイトン札幌で第17回TKC全国役員大会が盛大に開催された。

「全国役員大会って、何？」と何も分からぬまま、お役目を頂戴し、朝早く午前8時半頃から、地下鉄「大通」駅の南北線ホーム・東西線に乗り換えるコンコース横で、TKCマークの青い法被を着て、乗り換えを案内する看板を持ち、ただ1人で立ち続けた。

けど、全国から来る参加者は、札幌駅からタクシーに乗り合って会場に向かうようで、わざわざ地下鉄で乗り換えまでして「西11丁目」駅のロイトン札幌に行く人はほとんどいない。

代わって、コンコースを歩く市民から「TKCって、何？」「どんな人が集まるの？」「全国からどの位の人が来るの?」「それはマーク？どんな意味があるの?」といった質問攻めにあう。ようやく午後3時前、お役目から解放され、遅い昼食を摂った次第。これが、入会直後のTKCの洗礼だった。

そして、秋季大学が9月に釧路で開催されることを聞いたが、参加申し込みをしていなかった。すると、広報委員会の委員長を務めていた小中圭三会員から電話が入った。「駄目だよ、秋季大学に参加しないと。稲垣英樹局長から聞いた、元新聞記者でしょ。パネルディスカッションの記事を書いて」といわれ、急きょ車で釧路に向かうことに。

夜明け前に札幌を発ち、お昼前に会場に入り、秋季大学に参加。パネルディスカッションを拝聴し、発言内容の要点をメモしていく。全神経を集中させていただけに少々疲れを覚えるも、翌日に予定があるので、懇親会前に会場を後にし、札幌へ戻る。深夜、自宅に無事到着した。これが、広報委員会からの最初の洗礼。こうして、広報委員会との関りが今日まで続くことになるのだった。

草創の想いを聞き受け継ぐ

確かこの年の暮れだったと記憶しているのだが、年末の広報委員会・忘年会が定山渓の『ぬくもりの宿 ふる川』で行われた。

翌朝、チェックアウトを終えると、1階ロビーで、小中会員と朝賀伸也会員がコーヒーを飲みながら談笑していた。送迎バスを待っているらしい。声をかけられ、お二人の横に座ることに。

お二人共、北海道会の草創期からの会員で、しかも断続的に広報委員会に関わってきたという。広報委員会や『かいほう』の沿革、『かいほう』の編集方針とか位置付け、あるいは掲載内容・企画に対する想い、さらに朝賀会員が小説家を志していたとか、留目正会員はプロのカメラマンはだしで表紙のカラー写真を担当していたとか、初代の広報委員長である西本裕会員は多趣味のコレクターで収拾（収集）がつかないとか、をお聞きした。結局、昼食をごちそうになり、午後、お二人をご自宅近くまで当方の車でお送りした。

『創立30周年記念誌』の制作

平成14年、小中会員の次に委員長に就任したのは、薄井タカ子会員。担当の副会長は、

小平トミ会員だった。小平会員は、金坂和正会員が昭和62年から平成3年にかけて委員長を務めた後、平成9年まで委員長を務めており、この度副会長として執行部に戻ってきた際、広報委員会の担当となり、薄井会員を指名したと聞いている。

「頼まれたら断らない」のが、薄井会員のポリシーらしい。薄井会員は、旭川在住。広報委員会の日は、ほぼ札幌に宿泊だったと思う。当時、TKC北海道会の事務局は、南7条西1丁目の弘安ビルにあり、委員会終了後は、たいてい南7条西3丁目の居酒屋で海鮮料理を食した。

小平会員が特に好んでいたのではなかろうか。小平会員は、実によく語り、よく食べ、よく飲み、その健啖家ぶりに驚いた。細身でスタイリッシュなのに、とてもエネルギッシュで、委員会でお会いする度に元気と活力をいただいていたような思いがする。

この年の広報委員会は、『かいほう』の編集・発行だけではなく、北海道会の『創立30周年記念誌』の制作も担当していた。あいさつ文や寄稿文の原稿依頼、座談会やパネルディスカッションの記事まとめ、過去の膨大な写真や『かいほう』をひっくり返しての年表作成など、精力的にバタバタと作業を進めた。

結構、しんどい思いをしたものだ。だから、作業を終え、皆で居酒屋に行けば、最初のビールが口いっぱいに広がって胃袋に染み入り、新鮮な魚介類を舌鼓し、語り合うのが至福の時間だった。

レベルアップのきっかけ

平成16年、薄井会員が旭川支部長に就任するので、代わって岩本敏美会員が広報委員長に就任した。岩本会員は「編集等の知識や技術はないので、委員の先生方に任せます」と言い、『かいほう』の編集作業等の仕切りは委員が担当したが、委員会の会合運営や理事会等への折衝などは、きっちりとこなしていた。

委員会には、小中会員が特別委員を務め、また編集の心得を持つ早津善行会員もいて、『かいほう』の編集・発行はそれ以前と比べ格段とレベルアップした。

小中会員と早津会員の、それぞれの独特な言い回しに戸惑いつつも、さまざまな事柄について意見を交わした。早津会員のこだわりは、とても示唆に富んでおり、大いに触発された。

『かいほう』は「機関誌」なのか、「広報誌」なのか、「啓蒙誌」なのか、「情報誌」なのか、「同人誌」なのか、「会員誌」なのか。あるいはセンターや支部などが発行する『かわら版』を扱うか等々、そんな些細な・こだわらなくてもいいような事項を含め、『かいほう』がもっと充実し皆さまに読まれるようにするにはどうすればいいのか、皆で真剣になって語り合ったのが懐かしい。

岩本会員は、委員長を辞めてからも、特別委員や担当副会長として広報委員会に関わり続け、律義に毎回の編集会議に出席し、いろいろな企画も提案していただいた。確かコラム「eひと・eはなし」のタイトル名は、岩本会員の提案だったと記憶する。

（次号へ続く）